最終報告書レポート

「アジアのろう LGBTQ 支援を考える～フィリピンの活動調査でみえたこと～」
“Research of activities on the Deaf LGBTQ community in the Philippines”

ろう者かつ LGBTQ の人たち

私は大阪を中心にろう者かつ性的マイノリティ（以下、ろう LGBTQ）への支援団体 Deaf LGBTQ Center の代表をしている。Deaf LGBTQ Center は２０１４年５月から活動をスタートした。<写真 1>の図はセンターの大きな事業をまとめたものである。

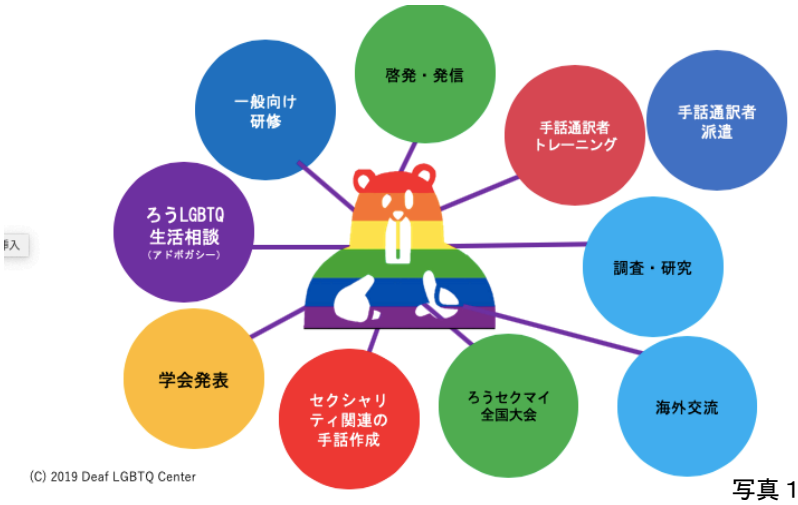


写真 1

異性愛のろうコミュニティに多様な性について理解を広めるための講演をしたり、手話通訳者のためのトレーニングをしたり、「ろう LGBTQ サポートブック」の発行や多様な性をあらわす手話表現の動画制作、年一度開催されるろう LGBTQ の全国大会運営等、幅広く活動を進めている。２０１９年１１月には福岡市で第５回目の大会が開催されるが、参加者は年々増加していて、第３回の大阪大会では１３０名の参加があった。今回のフィリピン調査は海外交流と調査研究を合わせたところになる。ろう LGBTQ 支援を進めるとき、ろう者として、性的マイノリティとして、双方のアイデンティティについて知る必要がある。社会で一般的に使われている「聴覚障害者」についても一つでまとめられるものではない。例えば、音声言語獲得前期に失聴し、手話を第一言語として使用している人が「ろう者」、音声言語獲得後に失聴、おおむね思春期以降、もしくは成人期以降に失聴した人が「中途失聴者」、補聴器等で音声言語の識別がある程度可能な人が「難聴者」というように大きく三つに分けられている。障害受容もアイデンティティ獲得過程もさまざまである。コミュニケーションについても「日本手話」「日本語対応手話」「手指日本語」等のようにそれぞれ異なっている。日本手話は視覚言語であり、空間を活用して表現する。その中ではちょっとした眉やあご、肩の動きも大きな意味を持つ。文法や語順なども音声言語とは大きく異なる。しかし、日本語対応手話や手指日本語は日本語の文章に手話の単語を当てはめたようなものである。そこには大きな違いがある。また、手話は世界共通だとよく言われるのだが、英語と日本語が異なるように、日本手話とアメリカ手話も異なっている。

セクシュアリティも多様で、性的マイノリティ、つまり LGBTQ にもそれぞれの立場がある。また、LGBTQ 以外の性もあり、揺れる/揺れたい人（クェスチョニング）、クィアと名乗ることもある。インターセクシュアルは身体的な性別が典型的発達ではない場合の総称で、女性器と男性器を両方持って生まれる人もいれば、どちらかが未発達で生まれる人など様々である。エイセクシュアルは人を好きにならなかったり、恋愛に興味がなかったり、恋愛はするがセックスをしたいと思わなかったりする。日本では「LGBT」と使われることが多いが、欧米などでは LGBTQ 以外のセクシュアリティの人たちも含めるという意味で「LGBTQ」や「LGBTQIA」、「LGBTQ＋（プラス）」と表現している。<写真 2>

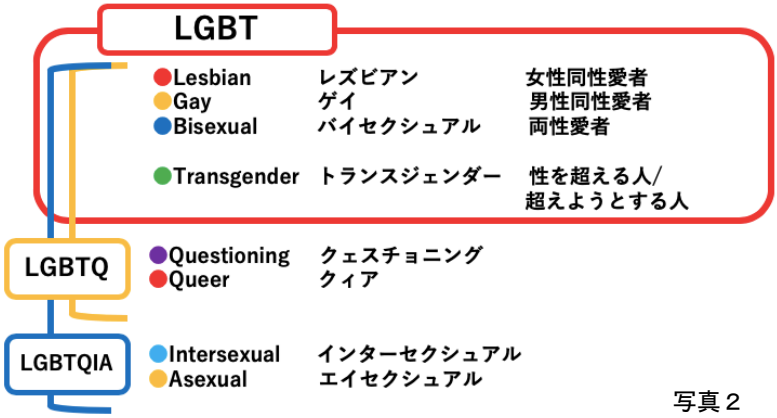


写真２

フィリピンのろうコミュニティ

フィリピンの聴覚障害者人口についてはフィリピン政府統計によると約１２万千人いることがわかっている。その中でろう者、特に手話を習得している人は９７５人ということもわかっている。フィリピンのろう者は、日常会話ではフィリピノ手話（Filipino Sign Language: FSL）を使い、公的な場所（たとえば学校や役所など）では、ピリピノ手話（Philipino Sign Language :PSL）を使うことがある。PSL はいわゆる標準手話で、FSL はフィリピンろうコミュニティによって形成された手話であり、そこに違いがある。２０１１年に政府の教育関係の長官が、ろう教育の現場では PSL を使用する必要があると打ち出したことを機に、ろうコミュニティからの反発が起こり、活動が活発になった。フィリピンは７０００以上の島を有するので、教育機関を通じた同一手話の普及は音声言語以上に困難であることがわかる。また、地域によって異なる手話が使われていて、手話自体が極めて多様であることもフィリピンろう文化の言語的特殊性であるといわれている。　２０１８年ドゥテルテ大統領はフィリピン手話（ＦＳＬ）を国の公用語として認定し、公共機関や学校でのフィリピン手話使用や通訳を広める「フィリピン手話法」（共和国法１１１０６号）に署名、成立させた。法成立でろう教育の現場ではフィリピン手話の授業を必須とし、また政府機関、法廷、テレビなどでのフィリピン手話通訳を増やすことを目的としている。この法律が使える場面は限られているが、大きな前進だといわれている。

フィリピンの LGBTQ に対する法的保障

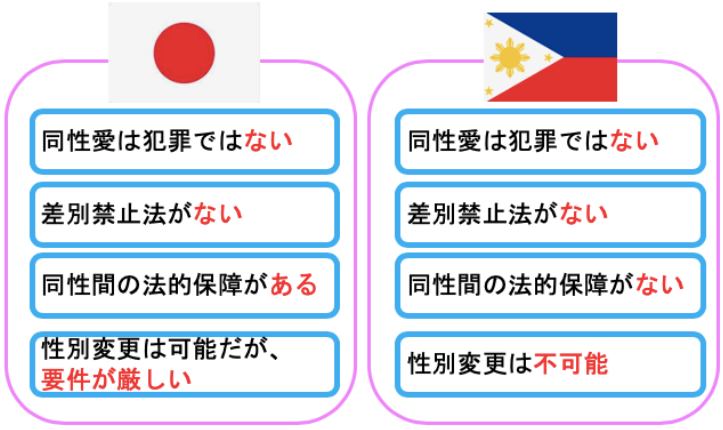


写真３

＜写真 3＞はフィリピンと日本の LGBTQ に対する法的保障がどのようになっているかをまとめたものである。日本では同性婚はまだ認められていないが、パートナーシップ制度を取り入れる自治体が増えてきている。この制度は婚姻と同等の法的な効力は持たないが、病院での手術同意書にサインができることや面会ができるなどのメリットがある。電通総研によると２０１９年４月時点では４２６組の同性カップルがこの制度を申請している。また、性別変更についても名前変更や性適合手術を受けるといった条件をクリアしていれば可能となる状況がある。そして、フィリピンでは家族法で、結婚とは「男女間における永遠の絆という特別な契約」と明文化されている。カトリック教徒が大半を占める保守的文化の国なので、フィリピンで同性婚が認められる可能性は低いといわれている。性別変更も認められておらず、法律上での出生証明書の「訂正」は認められているが、出生証明書に何らかの誤りがあった場合などのみである。過去にインターセックスの人の裁判で性別変更が認められたこともあるが、トランスジェンダーでは認められていない。そのように、日本と比べてみると大変厳しい状況だということがわかる。

Pinoy Deaf Rainbow（ピノイ・デフ・レインボー）

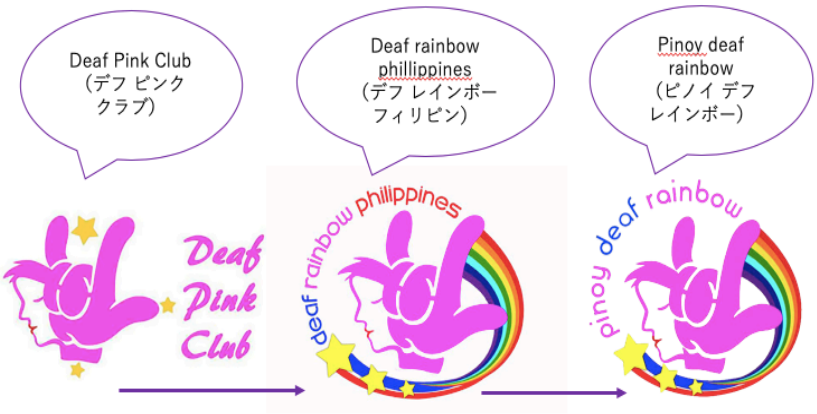


写真４

フィリピンのろう LGBTQ 団体は、この種の団体としてはアジアで初めての団体として、２０１１年に設立された。設立当時は「Deaf Pink Club（デフピンククラブ）」という個人的な集まりだったが、活動を本格化させることで「Deaf Rainbow Philippine（デフレインボーフィリピン）」と改称している。やがて、フィリピン人というアイデンティティを前に出したいということで「Pinoy Deaf Rainbow（ピノイデフレインボー）」と改称した。＜写真 4＞ この団体はマニラを中心に活動を進めている。ピノイデフレインボーの活動目的について「ろう者かつ LGBTQ の人たちを守るために声をあげて闘う」ということがはっきり明記されている。最終的にはろう LGBTQ だけでなく様々なマイノリティが参加できる包括的な社会づくりに貢献したいということも明記されている。

＜写真 5＞は Pinoy Deaf Rainbow の傘下のグループである。ろうトランスジェンダーだけの団体やろうレズビアンだけの団体、ろうクィアだけの団体があり、お互いに連携を図っている。LGBTQ といっても一括りされるのではなく、レズビアンとしての課題、ゲイとしての課題、トランスジェンダーとしての課題などのようにそれぞれの課題や支援方法が異なる。トランスジェンダーではホルモン治療やカウンセリングなどの特有の課題があり、それについてはろうトランスジェンダーの団体で共有、解決を進めることになっている。さらに、フィリピン全土で見ると Pinoy Deaf Rainbow を入れて６つのろう LGBTQ の団体がある。それぞれが交流を図りながら活動を進めている。＜写真 6＞

写真５

写真６

初めてフィリピンに行く

２０１８年１２月１日、生まれて初めてフィリピン・マニラに行く。同じ東南アジアの国でありながら、彼らがどのような生活を過ごしているのかはあまり知らない。テレビを通してみる彼らの姿しか知らない。スペインなど様々な国からの長い被植民地経験を経て、カトリック教の信者が多い国でありながら、ろう LGBTQ の人たちがどのように生活を過ごしているのだろう。彼らのコミュニティと関わることで、アジア、特にフィリピンから学びたいと考えた。欧米などでは１９８０年代からろう LGBTQ ムーブメントが始まっていて、それらに関する論文や書籍、映像が多数残されている。しかし、アジアにもそういったムーブメントがあるのだろうか、ずっと頭の中で引っかかっていた。私自身、日本財団からの支援を得て、２０１５年～２０１７年までの２年間、LGBTQ については先進国といわれているアメリカやカナダの大学で「ろう LGBTQ 学」を修了し、ろう LGBTQ 活動団体でも運動や支援方法について学んだ。留学中には同性婚をしたフィリピン出身のろう女性と友人になり、フィリピンという国の様々な背景や２０１０年からろう LGBTQ の活動団体が存在しているということを教えてくれた。実際、日本のろう LGBTQ ムーブメントは、アジアの中でもまだ発展途上である。２０１０年に設立された Pinoy Deaf Rainbow は相談支援だけでなく、ろう LGBTQ 自身の自己開発プログラムやリーダーシップスキルトレーニングプログラム、HIV や AIDS 支援、彼らの習性や価値観に沿ったカウンセリングなどを積極的に実施して

いる。日本のこれからの活動を考える時、このPinoy Deaf Rainbowから学ぶものは多いだろう。彼らのコミュニティと関わることで、私自身にできることを考えてみたかった。そこで、２０１８年１２月１日から２９日までの約１ヶ月間、Pinoy Deaf Rainbowからの協力同意を得て、フィリピンのろうコミュニティに関わる人たちについて活動調査を実施することとなった。

活動調査をはじめて

まず、最初に視察をしたのはDe La Salle College of Saint Benilde School of Deaf Education というカレッジだ。
＜写真７＞
この学校は私立で、フィリピンではDe La Sell（デ・ラセール）系の私立学校が数多く存在している。その中の一つ、このBenilde Schoolは聴者中心のカレッジだがろう者のためのDeaf Education Programが充実している。計１３名のろう教員やろうスタッフがFSLで授業を行っている。そのように、フィリピンのろう者の多くは高校を卒業し、このカレッジでより専門的なことを学ぶことができるようになっている。

写真７

この日、IT関連の授業が行われており見学させていただいた。ろうの教員が手話でわかりやすく説明を行っていた。IT関連の資格を取得することで、ろう者の一般企業への就職が有利となると教えてくれた。
＜写真８＞

写真８

教室の案内標識にはすべて手話の表示がなされていた。これはろう学生だけでなく、聴者の学生にも「手話」が身近にあるということを知らせるためでもあるということを教えてくれた。そういったことからわかるようにろう者と聴者の関係づくりに力を入れていることが伺える。＜写真９＞

写真９

見学の後、De La Salle College of Saint Benilde School of Deaf Education で働いている職員の Bronson さんをインタビューした。彼はろう者、そしてゲイであり、Media development Specialist（メディア開発スペシャリスト）として勤務している。彼のろう者／ゲイとしての経験を聞くことでフィリピンのろう教育／ろう LGBTQ コミュニティの課題が少しずつ
みえてきた。＜写真 10＞

写真１０

また他の日には同じ学校のろう教員の Jennifer さんをインタビューした。彼女はろう者でストレート（異性愛者）だが、多くのろう LGBTQ 学生と接し、教えてきた。彼らとの関わりについて、ストレートのろう者の視点から経験を伺うことができた。

写真１１

１２月７日には聴者中心の HIV/AIDS 啓発団体「Love YourSelf」を訪問した。私自身の受け入れ団体である Pinoy Deaf Rainbow 代表の Disney さんがそこでボランティアでスタッフをしている。彼女が聴者スタッフに手話を教えつつ、
やり取りをしたり、動き回って
いる様子を観察することができた。彼女はろう LGBTQ コミュニティだけでなく聴者 LGBTQ コミュニティと積極的につながりを作るなど「横のつながり」を大切にしたいという姿勢が見られた。＜写真 11＞

※Love Yourself http://www.loveyourself.ph/p/hiv-test-sites.html

そして、その後、代表の Disney さんと副代表の MJ さんお二人から Pinoy Deaf Rainbow の活動史やろうと LGBTQ のダブルの問題、これからの動きなどについてのレクチャーをしていただいた。二人ともトランスジェンダである。<写真 12 と 13＞

レクチャーの内容について以下の通り簡潔にまとめてみた。Pinoy Deaf Rainbow はフィリピンろうあ連盟とのパートナーシップを組んでいる。
自分たちのろうLGBTQとしてのアイデンティティや誇り、文化などを重要視しながら活動を進めている。また、ろうLGBTQ当事者がスムーズに社会生活を送れるようサポートするとともに、自己啓発プログラムやリーダーシップ養成などを実施している。心理的援助の三つの軸として、自己受容、自尊心、自信についてのピアカウンセリングを行なっている。それだけでなく、社会自立のためのプログラムや能力開発、求人紹介も行なっている。今後の目標としては、会員を増やすことや聴者LGBTQ団体とのパートナーシップに力を入れたいとのことだった。

写真１２

写真１３

聴者LGBTQコミュニティに関しては、ろうLGBTQへの認識を高めるために
①毎年開催されるプライドマーチやLGBTQ関連の企画に積極的に参加
②ソーシャルネットワークの推進
③会議やフォーラムなどでろうLGBTQへの意識を高めるために当事者自身が参加する。
④ろうLGBTQ当事者同士の親睦を深めるためにミニキャンプやスポーツ活動、野外劇などにも取り組んでいる。家族に対しても理解促進のために定期的なワークショップを開催している。

写真１４

その後、それぞれ一人ずつインタビューを行った。＜写真 14 と 15＞

質問の内容は以下の通りである。

写真１５

・異性愛中心のろうコミュニティにとってLGBTQ の人たちをどう感じていますか？
・異性愛中心のろうコミュニティの問題は何ですか？
・あなた自身はそのような状況をよくするためにどうしますか？どう助けることができますか？
・聴者 LGBTQ にとって、ろう LGBTQ の人たちをどう感じていますか？
・聴者中心の LGBTQ コミュニティの問題は何ですか？
・あなた自身はそのような状況をよくするためにどうしますか？どう助けることができますか？
・あなたにとって「LGBTQ」は何を意味しますか？
・あなたのろう教育経験を教えてください
・あなたが職場で「ろう」や「LGBTQ」について差別を受けたとしたらどうしますか？
・あなたは差別へのアプローチをどこで学ぶことができましたか？
・Filipino Sign Language Act（フィリピン手話法）はあなたを助けることができますか？
・最後に日本で差別と向き合っているろう LGBTQ の人たちへのメッセージをお願いします。

ケソン市のプライドパレード

滞在中にケソン市が急遽、Quezon City Pride ２０１８を１２月８日に実施することを表明した。Pinoy Deaf Rainbow も参加するという情報をいただいたので、私自身も参加し、さまざまなろう LGBTQ の人たちと交流を図ることができた。
＜写真 16＞

写真１６

ろう教育の現場を訪ねて

ろう LGBTQ コミュニティの調査を進めるにあたって、彼らの「ろう」としてのアイデンティティ形成において重要な役割を果たすろう教育について調査を進める必要がある。そこで、私はメインストリーム（統合教育）の学校やいくつかの公立や私立のろう学校を視察した。

写真１７

日本財団からの支援により２０１８年８月に設立されたフィリピンで唯一ひとつだけのバイリンガル・バイカルチュラル（二言語・二文化）ろう教育を実施している Benilde Deaf School を視察した。
この学校はろう児にフィリピン手話／読み書き＆ろう文化／聴者文化を教えている。また、フィリピン手話が堪能なろう者の教員が多数勤務している。多くの学校がろう児に聴者の価値観に合わせた教育（聴覚口話法）を実施している中、そのような学校は珍しく、ろう児が手話で生き生きと学んでいる姿を見ていてうれしく感じた。
＜写真 17 と 18＞

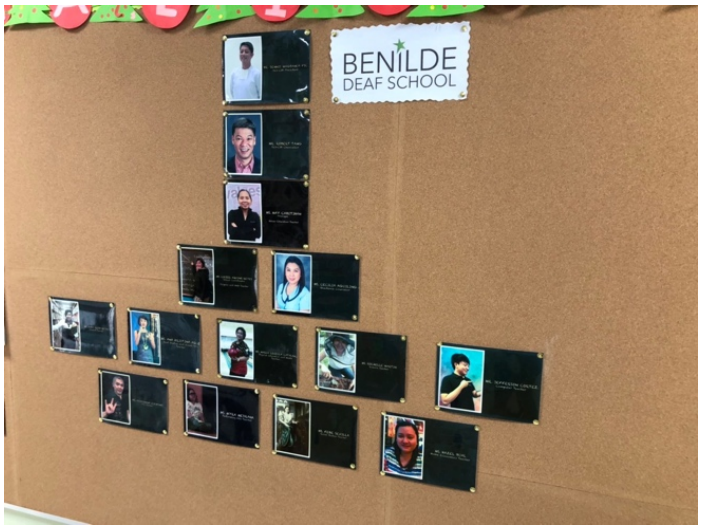


写真１８

当事者の立場から

他の日には、自身がゲイであることをオープンにし、LGBTQ やさまざまなイベントで手話通訳活動をしている Bay さんにインタビューをした。彼はカナダで生まれ、２０歳の時にフィリピンに移住したフィリピン人である。同性婚が認められているカナダでの生活と比較しながら、彼のゲイとして、手話通訳者としての経験を伺うことができた。そして、ろう LGBTQ コミュニティの側面についての貴重なお話も伺うことができた。
＜写真 19＞

写真１９

また、他の日にはろう者でレズビアンの Bing さんをインタビューした。Bing さんはメインストリーム（ろう児と聴児が共に学ぶ統合教育）の学校 La Sale Greenhills でカウンセラーとして勤務している。Bing さんは大学でカウンセリングを専攻し、ろう者の価値観にあったカウンセリングを学んだ。ろう生徒や両親、ろう生徒に関わる人たちへの相談を手話で行なっている。学校自体がカトリック系のため、自分のセクシュアリティをオープンにしながら仕事するのは難しい部分があるということも教えてくれた。
＜写真 20＞

写真２０

みんなに愛されてきたろう学校

来年で閉鎖されるろう学校が近いうちセレモニーするからという情報が入り、Miriam College Southeast Asian Institute for the Deaf ＜写真 21＞を視察した。この学校は Miriam College に併設されているろう学校で小学部から高校部までのエスカレート式である。
＜写真 21 と 23＞

写真２１

この学校がいかにろう児やコミュニティに愛されてきたということがわかる絵画や「アイラブユー」の手話サインを表現した Deaf Art（デフ・アート）が多く展示されていた。＜写真 22＞

写真２２

写真２３

滞在中に知り合いになった、ろうのブッチレズビアンの Jamie さんが自身のパートナーが働いているアイスクリーム屋さんに案内したいと誘ってくれた。そこはケソン市にある大きなショッピングモールの「Elait」というお店だった。マイナス何度かのアルミ板の上でクリームの素をこねながら作っていくタイプのアイスクリーム屋さんだった。勤務されているスタッフは全員がろう者で、店内には指文字表や挨拶の手話表現のポスターがいたるところに設置されていた。視覚的な情報を上手に使いながら聴者のお客さんの注文をスムーズに受け取っている。Jamie さんとパートナーがカップルであるということはスタッフ全員が自然に受け入れていて、仲良く会話を楽しんでいる様子を伺うことができた。

＜写真 24 と 25＞

写真２４

写真２５

聴者 LGBTQ の身体表現

聴者のトランスジェンダーの身体表現についても関心があったので、フィリピン大学内の Vargas Museum で「Trans personal Instructions」（トランスの個人的な説明書）のパフォーマンスを鑑賞した。パフォーマンスは多様性や Intersectionality（インターセクショナリティ・社会的抑圧の交差）、人権などを訴えたものが多く、出演者のアイデンティティもさまざまだった。

写真２６

＜写真 26＞

出演者のひとり、バニーさんは Gender Fluid の方でその揺らぎについてとても力強いパフォーマンスを見せてくれた。＜写真 27＞

写真２７

ろう LGBTQ 自身によって設立された手話教室

ケソン市クバオで２０１８年６月に設立された手話教室「Hand and Heart」を視察した。初めてろう者自身で設立された手話教室で、レズビアンである Gen さんがパートナーの女性と共に子どもから大人までフィリピン手話指導を行なっている。教科書はオリジナルのものでわかりやすく作られていた。
２０１８年に制定されたフィリピン手話法の影響で手話を学びたい人が増えているそうだ。Gen さんは自身のセクシュアリティをオープンにしているので、セクシュアルマイノリティの聴者も安心して手話を学ぶことができると教えてくれた。

写真２８

＜写真 28＞

また、子どもから大人まで親しまれている教材の手話の本を見せていただいた。

＜写真 29＞

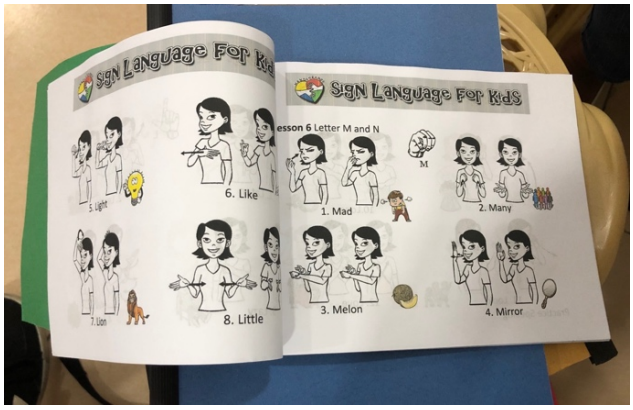


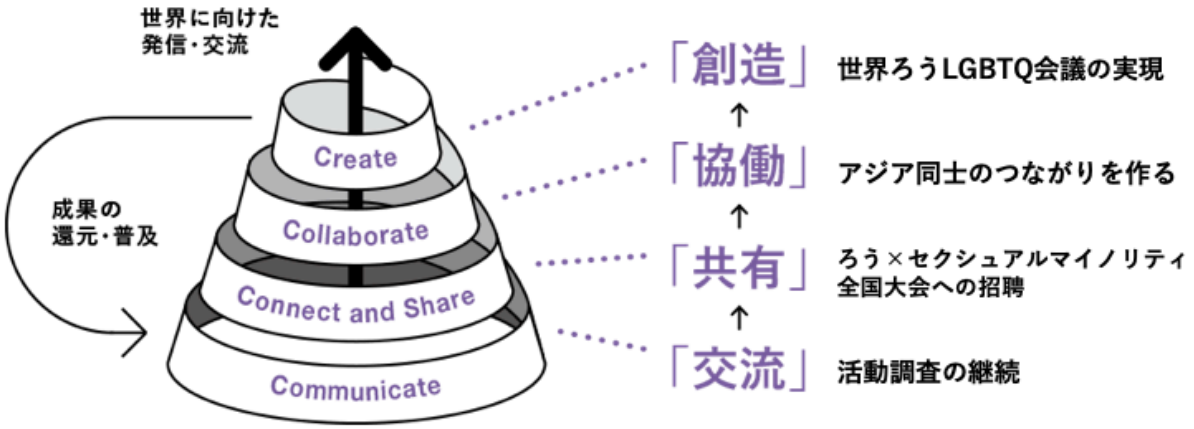
写真 29

フィリピンろうあ連盟としてできること

写真 30

滞在二週間を過ぎた頃、フィリピンで一番大きく力のあるろう者の団体、フィリピンろうあ連盟の会長キャロライン氏からインタビューに応じてもいいという連絡をいただき、待ち合わせのクバオ駅に駆けつけた。彼女は２０１８年にドウテルテ大統領が署名した「フィリピン手話法」制定に関わる重要な仕事をしている。インタビューでは、ろう者の権利向上やフィリピン手話の広め方、ろうコミュニティにおけるリーダーシップ、プロフェッショナルスキルの育成についてより深い内容を伺うことができた。ろう LGBTQ コミュニティとの連携についてはフィリピンろうあ連盟としても重要な役割だと教えてくれた。＜写真 30＞

これからのこと



国際交流基金アジアセンターHPより抜粋

まず、今回の調査をきっかけにアジア同士のつながりを作りたいと考えている。最近、同性婚が認められた台湾でろう LGBTQ の人たちはどう動いているのか、彼らから学ぶものは何か、そのようにフィリピンだけでなく、アジア全体のつながりを作っていきたい。この図はアジアセンターのコンセプトについて描かれたものです。このコンセプトを参考にしながら、日本のろう LGBTQ 全国大会でピノイデフレインボーの人たちを呼んで講演やワークショップをしたいと考えている。私自身の２年間の米国留学で作ったネットワークをアジアにもつないで、橋渡し役を果たしたいと思っている。最終的には世界ろう LGBTQ 会議の実現を目指して活動を進めていきたい。

さいごに

約１ヶ月間に渡るインタビュー活動は宗教的、経済的な理由から警戒を示す人もいた。彼らと真摯なやりとりを続けることで、フィリピンろう LGBTQ コミュニティについて、さまざまなことが見えはじめた。ろう LGBTQ 当事者や家族、フィリピンろうあ連盟、ろう教育に関わる人たち、手話通訳者など、1 ヶ月間で 23 名インタビューさせていただいた。これはアジアにおけるろう LGBTQ 支援への大きな一歩となる。これらの大切なデータをもとにフィリピンろう LGBTQ コミュニティの今後とも関わりを続けていきたい。

本当にあたたかくサポートしてくださった独立行政法人国際交流基金アジアセンター、Pinoy Deaf Rainbow、フィリピンろうあ連盟、Load na Dito、森壮也さん、ウィンさん、プリンセスさん、フィリピンろうコミュニティの皆さま、本当にありがとうございました。

2018 年度アジアフェロー 山本芙由美（やまもと ふゆみ）/Deaf LGBTQ Center